

パパ、いつもありがとう

木下 きのした
渚 なぎさ

私は五才から家で勉強しています。台所のテーブルで、イスの上に座布団を何枚も置いていました。まだ小さかった私は、そうしないと、テーブルにとどかなかったからです。

その時、パパは、「よし、なっちゃんのために、タバコをやめよう。勉強机を買うためにお金をためよう。」と言いました。

「わあ、私だけの机、いいなあ！」私はとびはねました。うちのパパは、病気で片足を切断し、ほかのパパみたいに働けませんでした。大きい買い物は、大変でした。

「タバコをやめよう。」と言ってから、パパはよくつまようじをかんでいました。

「パパ、つまようじって、あまいの？おいしいの？」と私は聞いたら、

「パパは、タバコをすいたいけど、がまんしてるんだよ。なっちゃんのためにね」とママが言いました。

小学生になる前の三月のことです。

ある日、パパは、「明日、勉強机を買いに行こう。パパからの入学プレゼントだ。」と言いました。

「やった！」私は大喜びでした。一晩中ねむれませんでした。

次の日、パパはぎ足をはめて、ママと三人で出かけました。

家具屋さんで、たくさんの勉強机を見て、どれもピカピカでした。私は、照明がついている、ブラウンのを選びました。机の上にジュエルのマット。下にピンクのハートのじゅうたん。調節できるブルーのイス。本棚もセット。

こんなすばらしい入学プレゼントなんて、すごくない？

でも面白い物のあと、そんなにたたないうちに、パパは入院しました。

四月、私は一年生になりました。毎日、勉強机で宿題して、ドリルもしました。学校で百点を取ったテストを、その机のひき出しに入れました。パパ、早く退院してほしいなあ、と日記帳に書きました。退院したら、私の百点を全部パパに見せたいから。

でも、パパは黒いわくの中の写真になって帰ってきました。

今、私は五年生です。机の上に、パパの写真を置いています。毎日、パパは写真の中から、私の勉強の姿を見て、ニコニコ笑っています。私は、百点のテストを見せる時、「いいなあ、なっちゃん。よくがんばったねえ。」とパパがいつもほめてくれる気がします。私は、休けいの時、学校の事や家の事を全部パパに言います。パパは、やさしいから、私の話を全部聞いてくれます。

「パパ、勉強机を買ってくれてありがとう。パパ、大好き！」